
平成30年

11月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

平成30年11月の普及活動状況ダイジェスト版

新たなブランドづくり

西濃農林■スナップエンドウ なす独立ポット耕栽培の後作でスナップエンドウを実証

農業普及課とJAにしみのでは、なす独立ポット耕栽培の後作として、スナップエンドウの栽培を実証している。9月中旬には播種（種まき）したものは、11月中旬から収穫適期を迎え、直売所での販売を開始した。10月下旬に播種したものは、生育量が今一つの状況である。

農業普及課は、冬季の収穫を確保するため、ハウスのビニール被覆とポット部の被覆による保温、うどんこ病、ハスモンヨトウ等の病害虫防除について情報提供した。

今後、なすの独立ポット耕栽培の後作での有望な品目として、栽培技術の確立を図る。



【スナップエンドウの生育状況】

多様な担い手づくり

岐阜農林■担い手育成 青年農業士による出前講座実施

11月9日、岐阜農林高等学校において、青年農業士2名（橋本涼氏 大野裕氏）が園芸科学科2年生40名を対象に、出前講座を行った。農業高校生に、若手農業経営者の就農動機や経営理念について伝え、農業経営に対する理解を深めることを目的に、岐阜地域青年農業士連絡協議会の協力を得て実施したものである。

橋本氏は、非農家で普通科高校出身の自分がなぜ農家になったのかや経営理念について話した。大野氏は、兼業農家から農業経営者になりたいと、岐阜農林高校、農業大学校へと進んだこと、農業の魅力や苦労話をした。生徒からは、両講師に多数の質問があり、農業への関心が深まる授業となった。

農業普及課は、農業大学校・国際園芸アカデミーへの進学や、就農者への支援制度について情報提供した。今回は、同校の流通科学科生徒を対象とした出前講座を計画しており、引き続き支援を行う。



【講話の様子】

可茂農林■指導農業士 高校生との意見交換の実施

11月29日に加茂農林高等学校において、指導農業士と高校生との意見交換の場である”井戸「畑」会議”が開催され、就農に興味を持つ高校生23名が参加し、指導農業士9名と意見交換を行った。

会議はワールドカフェ方式で和やかに進められ、高校生は自身の夢を語ったり、指導農業士からの実際の経営の話に耳を傾けたりして、よい交流の場となった。

農業普及課では、指導農業士の活動を積極的に支援するとともに、将来の重要な担い手である農業高校生の活動についても支援を継続していく。



【井戸「畑」会議の様子】

東濃農林■農福連携・新規就農者育成 土岐地域農業経営者協会視察研修を支援

土岐地域農業経営者協会では、先進的農業経営に向けた自己研鑽と地域農業の活性化を目的に、毎年、視察研修を行っており、農業普及課で実施を支援している。今年度は、11月12日に、三重県鈴鹿市の福祉事業所が運営する農場を視察し、水耕野菜の栽培と障がい者の雇用状況を、また岐阜県就農支援センターでは、独立ポット耕による冬春トマトの栽培状況と、新規就農者の育成について研修を行った。

参加者は各自の経営の参考となる取り組みや、栽培技術について情報収集することができた。また、新規就農者2名も参加し、他の参加者との交流を深めることができた。

農業普及課では、今後も同協会の活動支援を通して、若手農業者の育成に取り組む。



【熱心に研修する参加者】

恵那農林■後継者育成 「後継ぎ講座」を開催！

11月28日に、中津川市、恵那市、JAひがしみの、恵那農林事務所からなる「恵那地域就農連絡会議」が「後継ぎ講座」を開催し、57名の生産者等が参加した。

恵那地域では、50歳以上の認定農業者の半数が後継ぎ予定者を確保しているものの、将来後継者に就農してもらうためには、規模拡大等による経営の活性化が必要であると農業普及課では考えている。

そのため、高山市で複合経営による大規模経営及び周年雇用を確立されている中野俊一氏を招き、これまでの経験から、元気の出る農業について語っていただいた。トークセッションでは、恵那地域の農業者3名と中野氏が意見交換を行った。今後の後継ぎ候補を就農まで導く手法や雇用者も楽しく働ける環境づくりなど、ヒントとなる話を聞くことができた。

農業普及課では、家庭内後継者をはじめ、担い手の増加を目指し、就農を希望する方の支援に積極的に取り組んでいる。



【トークセッションの様子】

下呂農林■指導農業士 朽本弘明氏が緑白綬有功章を受章

11月14日、下呂地区指導農業士の朽本弘明氏へ公益社団法人大日本農会より、農事功績表彰の緑白綬有功章が授与された。

同表彰は、農業分野で大きな功績を残した者に贈られるもので、今回102回を数え、本年度は全国で69名人が受章したが、下呂市では初めての受章者となった。

朽本氏は、長年にわたって指導農業士として活躍、岐阜県指導農業士連絡協議会長や第18回全国農業担い手サミットinぎふの実行委員長も務め、新規就農者の育成や地域農業の振興に貢献してきた。

11月15日は、農林事務所を来訪して受章報告をされた。農業普及課では今後も優れた経営を实践する指導農業士の方々と力を合わせて、地域農業の振興に取り組む。



【受賞の報告をする朽本夫妻】

売れるブランドづくり

西濃農林■GAP 認証GAPに取り組む新組織の立ち上げ～神戸町下宮青果部会協議会～

神戸町下宮青果部会協議会では、今までの下宮版独自GAP（簡易GAP）を発展させ、認証GAPへの取組みを強化するため、10月30日の事前協議を経て、品目をまとめた新たなGAP組織を設立することになった。11月8日にはGAP組織の立上説明会が開催され、組織の内容や規約等が説明された。農業普及課は岐阜県GAP確認制度に取り組むメリットや農場評価シートによるチェック項目について説明を行った。



【設立総会の様子】

これを踏まえ、11月19日には設立総会（名称：下宮青果部会協議会 ごと下宮GAP組織）、26日には農場評価シートを用いた第1回勉強会が開催された。農業普及課は勉強会での説明及び質疑対応を行った。今年度中の岐阜県GAP確認制度取得を目指し、集中的な支援をする予定である。

揖斐農林■柿 富有柿倶楽部一新商品開発に向けて

岐阜大学が開講する「富有柿倶楽部」で富有柿について学ぶ学生が、9月から大野町特産の富有柿の魅力若者に伝える新商品開発を進めている。今回は、学生のアイデアを基に管内の菓子店が創作した商品サンプルを試食し、味や品質管理等について意見交換を行った。この意見を参考にブラッシュアップした試作品について、岐阜大学生協や道の駅「パレットピアおおの」で、学生・消費者を対象にしたアンケート調査を行う予定。農業普及課は、今後も岐阜大学や大野町と連携し、学生の活動が円滑に実施できるよう支援を行っていく。



【意見交換の様子】

郡上農林■水稻 第4回郡上おいしい米コンテスト決勝大会を開催

11月18日郡上市明宝の明宝コミュニティセンターにおいて、「第4回郡上おいしい米コンテスト決勝大会」が開催された。このコンテストは地場産米のブランド化を推進する目的で、郡上市農業振興協議会が主催し、農林事務所も構成員としてコンテストの企画立案・米の食味審査・当日の運営などに携わってきた。



【表彰式の様子】

今回は、郡上市内外の稲作農家及び農業法人から91点の出品があり、予選審査で食味スコア・整粒率・味度を比較し、上位4点について決勝大会で試食審査を行った。

当日はコンテスト出品者、農業普及課・郡上市・JAめぐみの等職員、特別審査員を務めた郡上調理師会の会員など約60名が試食して順位づけを行った。また、県農業経営課革新支援専門員によるおいしい米づくりに向けた講演、最優秀賞をはじめ上位10点の表彰を行った。決勝大会終了後には、新たな企画として競売会を開催しコンテスト上位の米7品を市内の飲食店・料理旅館・直売所が競り落とし、会場は大いに盛り上がった。

農業普及課は、今後もこの様な活動を通して、地場産米のブランド化を推進していく。

飛騨農林■水稲 日本一の「美味しいお米」産地を目指して

11月26、27日に高山市民文化会館で、全国最大規模の米食味コンクール「第20回米・食味分析鑑定コンクール：国際大会 in 飛騨」が開催された。

今回は第20回の節目で、岐阜県で初めて開催される記念すべき大会であり、飛騨地域（下呂市含む）からも昨年を大幅に上回る443点が出品され、全体の出品点数は過去最高の5,717点を記録した。

当日は最終審査が行われ、国際総合部門では飛騨地域（下呂市除く）から11名が最上位の金賞の荣誉に輝き、その他部門でも多くの方が入賞した。

農業普及課は大会成功に向け、良食味米生産技術の確立に向けた各種調査、現地研修会による栽培管理指導、さらに出品の勧誘等を行った。

今後は「飛騨米」のブランド化に向け、関係機関と連携し、支援していく。



【国際総合部門金賞受賞者】

革新支援センター■女性起業グループ等 農村女性起業化促進研修を実施

11月29日に高山市、同30日に岐阜市において、県は、農村女性起業化促進研修を岐阜県6次産業化サポートセンターと共催で実施し、参加者50名を得た。

対面販売をテーマに「売れる瞬間を演出する商品PR手法」と題して、6次産業化中央サポートセンタープランナーの木村俊朗講師による講演と、参加者による対面販売の実演を行った。

商品の持つ魅力を最大限に引き出す陳列・POP・試食販売の方法について具体的に学ぶとともに、消費者に仕掛ける企画力の重要性を知ることができた。



【対面販売の実演（岐阜会場）】

住みよい農村づくり

中濃農林■集落営農組織 新法人設立 農事組合法人ほらど未来ファーム

関市の北西部に位置する洞戸地域で「農事組合法人ほらど未来ファーム」が設立された。洞戸紋原地区のほらど集落営農組合が核となり、洞戸全域の生産者40人で組織された。

11月1日に創立総会が開催され、組合長の神山博和氏から「中山間地域の農地を守っていききたい。夢のある未来ファームとなるよう努力していききたい」と就任あいさつが述べられた。

農業普及課では、重点的に法人化検討会への職員の出席や専門家派遣を行うなど、支援を行ってきた。

今後は同法人の経営安定化に向け、新品目導入の提案など積極的に支援を行っていく。



【組合長就任あいさつ】